

「こころ」と「こころの理論」

Theory of Mind 概念に再接近する

企画・話題提供：	橋彌 和秀	(九州大学)
企画・司会：	小林 春美	(東京電機大学)
話題提供：	大坪 庸介 #	(神戸大学)
話題提供：	森口 祐介	(京都大学)
話題提供：	狩野 文浩 #	(京都大学)
指定討論：	松井 智子	(東京学芸大学)
指定討論：	木下 孝司	(神戸大学)

[企画主旨]

1970年代以降今世紀初頭までの研究の進展によって理論的・方法論的な道具立てが整い、心理学・行動生態学的観点からこころやコミュニケーションの生物学的・社会的基盤に実証的に接近することが可能になった。ヒトの特異的な協力や意図共有、共感の可能性も実証研究の俎上に載る現在、観察可能な行動の背景にある「こころ」という内的処理装置の起源について、理論・実証データの両側面から改めて考えたい。本RTでは4名の話者が“Theory of Mind”概念および誤信念課題に関連するそれぞれの観点及び具体的な研究を紹介する。その上で2名の指定討論者が、それぞれの研究も踏まえたコメントをおこない、全体で議論する。

Implicit vs explicit な心の理論 森口祐介

心の理論の最も有名な指標である誤信念理解は4歳から5歳頃に到達することが示されてきた。しかしながら、21世紀に入り、視線を指標と研究から、2歳以下の乳児でもimplicitなレベルで誤信念を理解している可能性が示され、前者のexplicitな誤信念理解との関係が議論されてきた。本発表では、両者の関係性についての現状を紹介したのちに、発表者自身の研究も含めて脳機能の側面から両者の関係性について議論する。

類人猿の誤信念理解 狩野文浩

本発表では、近年開発された予期的注視指標をもちいた誤信念課題に類人猿がクリアしたこと、そしてそれがどのような意味があるのか議論したい。ヒト幼児においては、従来の誤信念課題をクリアできる4歳よりもずっと早い1-2歳児でもこの課題をクリアできることが知られており、異なる認知システムが関わっていることが指摘されている。また、類人猿が従来の行動選択実験において失敗し、注視課題でクリアするのは機能的にどのような意味があるのか考察したい。

「こころを想定するこころ」の進化と発達 橋彌和秀

Premack & Woodruff (1978) の TOM 概念と「誤信念課題」の立ち位置とを再確認しその後の変遷を踏まえた上で、「こころを”あること”にして”取り扱う心理バイアス”として TOM を捉える可能性を議論したい。1歳半時点でヒトが他者の注意・知識といった認識論的状态を踏まえ自発的な関心・教示行為を見せることを示す我々の研究と TOM 概念の関連を論じた上で、自他の相互作用系列を統合的に解釈する情報圧縮装置として上記の「ヒト的な」心理バイアスが成立した可能性を提案する。

Theory of Mind とシグナルの共進化 大坪庸介

心の理論はヒトの社会性の根幹をなすものであるが、直接観察可能できない他者の心的状態を理解する能力がどうして進化するのだろうか？実は心の理論はシグナルによる「心の可視化」と共進化するのではないだろうか。相手に自分の意図を知ってもらうことで双方にとって相互作用が有利なものになるのであれば、意図シグナルの送受信は共進化するだろう。謝罪をシグナルと捉えた実証研究の知見をもとに、この可能性を検討する。

* 本 RT は新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」(認知発達班)の援助を受けた。